

翻訳

周 関

日本で生きている雲崗石窟

——木下杢太郎『大同石佛寺』を中心に——

鄭 高 咏 (訳)

解題

- 本稿は、北京語言大学文學院教授、周関が2023年7月に『北京大学学报（哲学社会科学版）』第60卷第4期に発表した「活在日本的雲崗石窟—以木下杢太郎『雲崗日録』為中心」を翻訳したものである。
- 周関は、趙暉が2017年に中国語訳した木下杢太郎の『大同石佛寺』をもとに論を展開した。趙が翻訳した『大同石佛寺』は1938年に座右寶刊行會によって再版されたもので、趙の「訳後記」（262頁）にそれについての詳細な記載がある。趙は日本語の書名『大同石佛寺』を『雲崗日録』と中国語訳したが、本翻訳では原文の『大同石佛寺』を使用している。
- 本文中で引用した日本語の著書および論文については、日本語の原著書の箇所を調べて、そのまま使用している。その際に、「訳補注」にて参照頁を明示した。
- 本稿における翻訳について、その趣旨を理解し快諾いただいた周関教授に、心より御礼を申し上げたい。なお、日本語の表現に対して、湯浅健司氏から様々なアドバイスを受けている。

* * *

要 旨

木下杢太郎は1920年に雲崗石窟についての考察を『大同石佛寺』にまとめ、出版した。この著作は、文字描写、文献検証、写真素描、内壁の拓本などを統合した包括的な実録であり、客観的な観察と情感豊かな旅行記として、多くの日本人に雲崗石窟の詳細を伝えた。木下杢太郎の著作は、日本における数多くの中国旅行記の中でも独創性があり、雲崗石窟に関する早期研究の系譜において、先行

研究をさらに発展させる端緒を開き、研究の架け橋の役割を果たした。また、日本で中国への踏査および旅行記の執筆が盛んに行われていた時期においても、木下杢太郎は独自の視点を保ち続けた。日本における雲崗石窟に関する研究の変遷は、近代日中関係の一端を映し出すものであり、さらに、『大同石佛寺』という著書も、その歴史の複雑性が満ちているのである。

キーワード：木下杢太郎『大同石佛寺』, 中国踏査, 旅行記

「…少くともこの顔面だけは、一の驚異であると断言して憚らないのであります。それから朝暮の陽光と空気遠近法と視点の移動とに随つて、常に其外觀を變じます。(中略) 跪いて禮拜する心持より他の心持では、わたくしはこの佛像を仰視することができませんでした^[1]」¹⁾。これは、日本の明治末期に木下杢太郎が中国の雲崗石窟第九窟の仏像を見た際に抱いた感慨である。

木下杢太郎(1885-1945)は、本名を太田正雄といい、かつて堀花村、地下一尺生、葱男などのペンネームを使用したことがある。彼の本来の職業は皮膚科医で^[2]、東京帝国大学医学部の教授でもあった。一方で、彼は画家、詩人、劇作家、翻訳家、美術史家、キリシタン研究家としても知られ、南蛮文学の創始者であったことから、日本の近代において、森鷗外に次ぐ「和魂洋才」の一典型と称されている^[3]。才能に溢れ幅広い分野に精通している木下は、20世紀初期に山西省大同の雲崗石窟を詳細に実地調査した。その記録と研究は、後の日本や中国における雲崗石窟研究において重要な意義を持っている。しかし、彼は雲崗石窟に深い感銘を受けながらも再訪することはなく、さらなる石仏の考察を十分に行うことができなかった。彼の大同石仏寺への調査とその後の離別の背景には、深い社会的および歴史的要素が絡んでいると考えられる。

一. 文字と画像による網羅的な記録

1916年、木下杢太郎は中国に渡った。奉天南満医学堂の教授を務め、奉天病院の皮膚科部長も兼任したが、のちに、これらの職務を辞して各地の古都を巡る旅に出た。1920年9月10日から16日までの間、画家、随筆家である木村莊八(1893-1953)と共に大同を訪れ、雲崗石窟の石仏を調査した。17日もの間、大同に滞在し、毎日スケッチや写真を撮影し、拓本や平面図を作成して、日々の活動を記録した。1922年、彼らは大同での旅の記録を整理した『大同石佛寺』をまとめ、日本の中央美術社から出版した。出版の翌年に東京でマグニチュード7.9の大地震が発生し、印刷部数が限られていたこともあり、その半分が震災で

失われたが、1938年に座右寶刊行會によって再版された。

『大同石佛寺』は画像記録が難しかった時代に上梓されており、見事に図文併存を成し遂げたと言えよう。初版刊行時には、山本写真館が撮影した石仏寺の写真30枚が加えられた。山本写真館は山本讚七郎（1855-1943）^[4]が1901年に北京王府井近くの霞公府街に開業した写真館^[5]である。山本は清朝の皇族、王公、大臣、および多くの在中外国人のために写真を撮影し、彼らとの交流は非常に深かった。初版の『大同石佛寺』に収められた写真30枚は、木下柰太郎が山本写真館から個人的な関係を通じて購入したものである。1910年、長男の山本明と4名の日本人が京綏鉄道に沿って北京から大同へと旅し、雲崗石窟の写真を大量に撮影した。木下柰太郎自身は撮影技術には疎かったが、画家としての視点から見ると、目で直接鑑賞する体験とカメラで捉える過程は必ずしも同じではないと考えた。一方で、「その代りにまた我々の看過した好き像の多数が再現せられてゐます^[6]」^[2]と述べていた。その後、木下が『大同石佛寺』を整理して再版するかどうか悩んでいたところ、山本明が現地で撮影した写真がそれを後押しすることとなった。山本明はその百余りの写真を快く書籍に掲載することを了承し、木下にとっては「謂はば圖譜の説明といふ意味で^[7]」^[3]、重要な支援となった。

初めて雲崗石窟を目にした際、木下柰太郎は当初、以下のように記述している。

暗闇の室内では無論今日午後見た諸石窟の印象を反芻したのでした。跪きたくなるほどの愛慕と、なぐり附けたくなるほどの憤怒との交錯です。前者は古代藝術の不朽の美から受けた刺戟で、後者はその最近の劣悪なる修覆に對する反感です^[8]。^[4]

木下は自然風化による仏像の破壊は避けられないと認めつつも、後世の泥を塗るなどの拙劣な修復手法による損害は容認し難いと指摘している。山本の多くの写真は石刻の芸術を美しく表現する一方で、粗雑で無造作な複彩の泥塗りによる損傷の惨状も如実に記録している。これらの写真は現在、百年以上前の雲崗石窟の本来の姿を記録した貴重な資料となっている。

『大同石佛寺』にはそれ以外に、木下柰太郎が作成した60枚以上のスケッチも掲載されている。これらのスケッチには、過酷な環境の下で目測または歩測で測定しながら描かれた平面図も含まれており、洞窟の外観や仏像の全体と細部の模写が描かれている。一部のスケッチは、木下が蠟燭のおぼつかない火の下で夜遅くまでかかって完成させたものである。さらに、木下が洞窟内で自ら取った拓本も随所に挿入している。

『大同石佛寺』は石仏そのものを記録するだけでなく、現地の人情や風物にも豊富に触れており、これらの描写は現地での害虫や極度の寒さといった苦労を忘れさせるとともに、画家や文人の芸術的感性が満ち溢れている。特筆すべきは、木下柰太郎は同時代の日本人が記

した中国見聞記とは一線を画し、色眼鏡を通して中国の現状を軽蔑することなく描写していた点である。日本の著名作家、芥川龍之介（1892-1927）は、1921年に上海を訪れた際に執筆した『上海遊記』において、「上海は支那第一の「悪の都会」だとか云う事です。（中略）私が見聞しただけでも、風儀は確に悪いようです^[9]」⁵⁾、「処が支那の車屋となると、不潔それ自身と云っても誇張じゃない。その上ざっと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしている^[10]」⁶⁾と述べている。たとえ「不潔」という表現が大げさでないとしても、全員が「怪しげな人相をしている」という記述は、芥川の主観に基づいた感じ方であろう。芥川に限らず、中野孤山も上海について次のように記述している。「唯道路の狹隘と路上の修繕行届かず、雨水常に溜りて、池をなし、糞尿之に混じて、臭氣鼻を衝き、嗅官為めに麻痺する。實に余輩外人には久しく堪へられない^[11]」⁷⁾。また、彼が描いた宜昌についても同様の記述があった。「市街の特徴として不潔は言語の盡す所でない、街道には行倒れもあれば、犬の死骸もある、糞尿は市上に押流されて臭氣は満々として蒸散してゐる、蒼蠅虻蚋は賣店の飲食物に群り集ふ、市民は之を怪まず、癖僻の我等之を見て嘔吐を催すに至る、彼の國人は之を平氣に見なす^[12]」⁸⁾。同様に、大都会である天津についても、曾根俊虎（1847-1910）が次のように記述している。「況や天津城外ニ於テヨヤ始メテ路上ニ臨メハ臭悪ノ氣俄然トシテ鼻ヲ穿チ汚穢ノ堆キ葦然トシテ眼ヲ病シム行路ハ極テ狹隘ニシテ凹凸多ク兩側高クシテ中央卑ク恰モ枯水乾泥ノ汚河ニ異ナラズ（後略）^[13]」⁹⁾。また、有名な中国研究者である内藤湖南（1866-1934）は、北京のことを「一大園圃^[14]」¹⁰⁾と評した。このように中国を旅行した日本人は、中国の汚くて乱雑な様子を遅れた文明の象徴として大々的に宣伝した。それに対して、木下杢太郎は『大同石佛寺』で厳しい環境や旅の苦勞について述べつつも、詩的な感性で現地の河川や丘陵、城壁と望楼、夕日と灯籠、高粱と大豆、驢馬や羊の群れなどを描写している。さらに、何ら差別的な気持ちを持たずに、テキパキと働く旅館の人々や素朴で純真な子どもたち、水を届けてくれる親切な農家たちを描いた。また、木下は岩石の褶曲を見て『芥子園図譜』の折帯や披麻などの筆使いを思い浮かべ、石窟周辺の植物についても、葉の形や花の色彩、およびそれぞれの科属を細かく紹介していた^[15]。これは、当時の日本の思想的な風潮において決して主流とは言えない視点であった。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国は清朝の末期から中華民国への歴史的な転換期を迎えていた。この時期、日本では日中関係や日本人の中国観、西洋観に大きな変化が生じていた。1905年11月2日、日本文部省は「清国留学生取締規則」と呼ばれる省令第19号を公布し、中国人留学生に対する取り締まりを強化した。これに対して、中国人留学生は一斉に反発し、連携して授業をボイコットするなど抗議活動を展開した。この時、日本のメディアは一連の騒動を利用して中国の国民性を貶める報道を行った。例えば、『東京朝日新聞』は「清國人の特有性なる放縱卑劣」^[16]という表現を使った。このような状況からも、日本の

民族主義が迅速かつ強烈に増長したことがうかがえる。

木下杢太郎が中国に渡る2年前に第一次世界大戦がヨーロッパで勃発し、欧州列強は戦争の影響で中国には手が回らず、多くの精力を注ぐことが困難であった。この時、日米は欧州諸国が東アジアへの注力を怠っている隙を突き、中国での勢力拡大を加速させた。日本の大隈重信内閣は山東半島に派兵し、中国に対して21カ条の要求を突きつけた。このような世界情勢の下、日本の探検家、大谷光瑞（1876-1948）は「亜細亜主義論」を唱え、1917年、『中央公論』に「帝国の危機」を寄稿した。日本は「内憂外患」に陥り、「次に亜細亜主義とは外患を治する妙用なり。即ち亜細亜人の平和と福祉を増進せしめ、他國の來て亜細亜を侵凌暴虐をなさんとするを禦ぐなり。是日本民族の天職なり、使命なり。是を能はざれば我民族は存せず^[17]」^[11]と述べた。

さらに「亜細亜主義は理念から実践に変わったと同時に、国際主義から極端な民族主義へと変わった^[18]」としている点は注目すべきである。こうした時代の転換期に生まれた『大同石佛寺』は、その独自性を示している。それは文字描写、文献検証、写真写生、内壁拓本などを統合した包括的な実録であり、客観的かつ情感豊かな旅行記でもある。作者の木下杢太郎は医者として実際の状況を記録することを重要視し、文学者として文字描写の力を理解し、美術史家として図像保存の重要性を深く考えていた。これらの要素が『大同石佛寺』を他の旅行記と差別化した。この書籍は日本の美術界と仏教研究分野で大きな反響を呼び、多くの日本の読者に雲崗石窟が持つ輝きと神秘性を初めて伝えた。また、他の多くの中国見聞記と異なり、この書籍は中国について政治的な目論見を持つのではなく、審美的な観点からの観察を通じた独自のスタイルで捉えていた。

二. 石仏の命を蘇らせる架け橋

実際に雲崗石窟を“新たな発見”したという観点では、木下杢太郎は先駆者ではなかった。木下が雲崗石窟を訪れる以前の1902年6月18日、伊東忠太（1867-1954）が調査チームを率いて山西省大同市を訪れ、日本人による雲崗石窟調査の歴史を切り開いた。伊東の調査日記によれば、彼らが雲崗石窟に滞在したのはわずか1日だったが、この短い訪問が後に雲崗石窟の考察史において不朽の記録として刻まれることとなった。1906年、『建築雑誌』第106号に掲載された伊東忠太の「雲崗旅行記」では、雲崗石窟の仏像は日本の法隆寺に残るものと類似している点が多いと記述されている。これは近代の海外の学術界における雲崗石窟に関する初めての記述であった^[19]。同年、美術雑誌『国華』第197号および第198号において、伊東の「支那山西雲崗石窟寺」が掲載された。『国華』は1889年10月に日本の著名な美術教育者および思想家である岡倉天心（1863-1913）と高橋健三（1855-1898）を中心に創

刊され、現在も百年以上にわたり発行され続けている日本で最も権威のある美術雑誌である。伊東がこの雑誌に雲崗石窟に関する論文を掲載したことで、広く世間に知られることとなった。「支那山西雲崗の石窟寺」は「石窟寺の年代」「石窟寺の現状」「石窟寺の建築的手法」「紋様」「佛像」および「結論」という6つの章で構成され、雲崗石窟の造営年代や現存状況、芸術的な淵源性、仏像と歴代王朝の皇帝との関係を簡潔に記述している。さらに、伊東自身が描いた8つの石窟の平面図も添付されている。

その後、日本の著名な美術史学者である大村西崖（1867-1927）や仏教学者の松本文三郎（1869-1944）もそれぞれの著書において雲崗石窟を紹介した。一方、中国ではすでに金王朝時代に曹衍による『大金西京武州山重修大石窟寺碑』があり、清朝初期には朱彝尊による『雲崗石佛記』が存在したが、これらはいずれも本格的な研究とは言えなかった。雲崗石窟が学術的な研究対象となったのは、概ねこの百年間のことであり、最初の半世紀における研究の大部分は日本の学者によるものであった^[20]。中国の近代以降の学者による雲崗に関する研究は、1918年に陳垣によって初めて本格的に開始された。彼は雲崗から帰還した後、短い「記大同武州山石窟寺」という文章を執筆し、1919年に『東方雑誌』の第十六卷第二・三号で発表した。この文章は、今日読み直すと、百年前に陳垣がすでに中国の古代文献における雲崗石窟に関する数少ない記述を発見し、さらに時系列で雲崗石窟の簡潔な年代史と北魏仏教の発展史を編纂したことが分かる。また、陳垣は「辺境の地であり、交通の便が悪いため、旅行好きの人々もその奇観を探ることはほとんどなかった^[21]」と述べ、歴史に封印された状況も指摘したのである。

木下杢太郎は単なる旅行好きだったから雲崗を訪問したのではなく、偶然に雲崗を発見した伊東とは異なる。前述のように、彼は出発前に当時入手困難であった文献を入念に収集していた。木下が1938年に再版した『大同石佛寺』の「重版大同石佛寺序」には次のように記されている。「われわれが始めて雲崗に行つた時には、その石窟石像に就いて記されたものは未だ少く、伊東博士の旅行記、松本博士の「支那佛教遺物」、シャワンヌ、大村西崖両氏のそれぞれの圖譜、陳垣氏の考證ぐらゐのものでした^[22]」^[12]。ここに出てくるフランスの中国研究家エドゥアール・シャヴァンヌ氏（Emmanuel-édouard Chavannes, 1865-1918）の『北中国考古図録』（Mission archéologique dans la Chine septentrionale, 1909）は最終的に入手できなかったため、彼はわざわざフランス駐日公使館の蔵書の一つ一つ調べ、必要な部分を書き写した。当時の厳しい旅行環境の中で、彼は事前に収集したこれらの資料を雲崗石窟まで持ち込み、現地で文献に記載されている内容を実際の状況と丁寧に照らし合わせて研究した。こうした経緯からも木下の雲崗訪問は単なる観光旅行ではなく、学術的な考察であったと言えるだろう。

伊東忠太は『支那山西雲崗石窟寺』にて雲崗石窟の「発見」は自身の中国考察で最も重要

な発見の一つと語っていた。雲崗石窟はすでに1500年も前から存在しており、伊東のいわゆる「発見」とは、彼が偶然にも壊れかけた石仏寺に入ったことで雲崗石窟を目にしたことを意味する。同時に、それは地元の人々には見慣れていたが関心が薄く、世界中の人々にとっても全く無関心な存在だったと言えるだろう。木下杢太郎は『大同石佛寺』において、保護されていなかった現状について生々しく詳細に記述している。例えば、ある洞窟は既に現地住民の庭の一部となり、洞窟全体が土壁で囲まれており、見知らぬ人が近づくと猛犬に吠えられることがある。別の洞窟はレンガの壁で区切られ、入り口には白が置かれ、中は台所や稲草の倉庫として利用されている。これらの事例は長い間、雲崗石窟が外界に知られていなかった理由の一端を示している。木下は念入な探索を通じて、これまでの研究や考察では見逃されてきた事柄を初めて「発見」したのである。例えば、西第十五窟については、「さう云ふ關係からシヤワンヌ氏大村氏亦其他に於ても本窟の内部の彫刻の複寫を見出すことが出来ません」¹³⁾。しかしながら、ひっそりと塵の中に埋もれ、人々の生活の中に埋没してしまつた仏像には、独自の美学的価値があるのである。「(前略) 區劃の上部にある一二龕中の坐像に頗る美妙端嚴の相をしたのがありました。挿繪第二十六に示すのは其一で、圓顔で鼻隆く、目及び口許に言ふべからざる愛嬌があつて、我々の想像し能ふ限りのノプレスを示してゐます、(後略)¹²³⁾¹⁴⁾と記されている。これらの記録により、石仏の存在が広く知られ、その生命さえもこれらの文章によって蘇つたのである。

その後、日本に続き、西洋の学者たちも雲崗石窟に対する関心を高めていった。特に有名なのはスウェーデンの学者シレン (Osvald Sirén, 1879-1966) であり、彼は1925年にロンドンで出版した『五世紀から十四世紀かけての中国彫刻』(Chinese Sculpture from the Fifth to the Fourteenth Centuries) という四巻の著作で、雲崗石窟の彫刻芸術を紹介した。この本は、66枚のコロタイプ印刷した写真を収録し¹²⁴⁾、仏像の衣装と衣紋の様式を詳細に分析している。その分析により、雲崗造像には初期のインド式袈裟、すなわち通肩と偏袒右肩¹⁵⁾の二つのインド様式着衣法、および後期の褒衣博带式¹⁶⁾の中国漢族様式着衣法という、インドと中国の両方の様式が見られることを指摘している。

しかし、第二次世界大戦終戦前における雲崗石窟の調査で最も長期間にわたって行ったのは、日本人だった。1938年から1944年にかけて、水野清一 (1905-1971) と長廣敏雄 (1905-1990) を中心とする京都大学東方文化研究所の調査隊は、計7回、合計200日以上にわたり雲崗石窟で発掘調査などを行った。その後、1950年代には全16巻32冊に及ぶ調査報告書『雲崗石窟—西曆五世紀における仏教寺院の考古学的調査報告』¹⁷⁾が次々と出版され、今日でも雲崗石窟研究の重要な文献となっている。

民国二十七年 (1938) に晋北自治政府民生庁より公布された『大同雲崗石窟寺古跡詳誌』には、「雲崗石窟に関しては、日本人の研究は甚だ詳しく、著書も甚だ多い¹²⁵⁾」と記されて

いる。木下杢太郎が著した『大同石佛寺』も、その中で非常に貴重な一冊であり、関連研究の系譜から見ても、本書は日本における雲崗石窟研究のみならず、世界的な雲崗石窟研究においても、先人の業績を受け継ぎ、新たな発展の端緒を開く架け橋の役割を果たしていると言える。

三. 世界の考古学中心の東方移行と日本の国策

日本人の雲崗石窟考察への関心が20世紀前半に集中した背景には、19世紀末から始まった考古学の調査対象の中心地域が徐々に東アジアへと移行する世界的な動向が影響している。欧米諸国のアジアにおける植民地活動が次第に拡大する中で、19世紀末から20世紀初頭にかけて西洋諸国による世界規模の「辺境探検」が相次いで行われた。この時期の主な探検対象となった地域は米州の内陸部に加えて、特に中央アジアの「西域」地方であった。ロシア、イギリス、ドイツ、フランスなどの各国の調査隊や探検隊が西域に次々と押し寄せていた。ロシア帝国の地理学者プルジェヴァリスキー（Никола́й Миха́йлович Пржева́льский, 1839–1888）は、1870年から亡くなるまでの間に中国西部を4回探検した。スウェーデンのスヴェン・ヘディン（Sven Hedin, 1865–1952）は、1895年以降、約5回にわたり中国新疆とチベットを探検し、古代都市楼蘭の遺跡を発見した。コズロフ（Козлов, 1863–1935）の探検隊は、1908年にアルシャー砂漠でカラ・ホト都市遺跡¹⁸⁾を発見し、多数の貴重な文物を持ち帰った。オルデンブルク（Ольденбург, Сергей Фёдорович, 1863–1934）は、1909–1910年と1914–1915年の2度にわたりロシア中央アジア調査隊を率いて中国新疆と敦煌を調査し、新疆の文物と敦煌の文献を大量に持ち帰った。このような世界情勢の中で、日本は「東アジア探検考古活動の多くが欧米学者の主導で行われていることや、中国学者の関与がほとんどなく、日本学者の貢献もごく稀である状況」に対して、「とても遺憾であると感じる²⁶⁾」のである。日本も遅れを取り戻すために、学術的な考察という名目で中国に対する調査が始まった。この動きは日を追うごとに勢いを増し、自然に考古学的な探検と考察旅行が、対外拡張戦略の文化的手段として機能も果たすようになっていった。

同時に、「日本の風潮が西洋化から東洋主義に転換したことについて、学術的な解釈と表現が急務である²⁷⁾」。明治時代において、日本の近代化の過程は広範な西洋化を示すものであった。これは法律や医学から文学や哲学に至るまで、あらゆる学問や芸術に影響を与えたと言える。例えば、1887年に設立された東京音楽学校は「西洋化」の代表例である。この学校は日本の近代音楽教育の端緒として創設されたが、東洋音楽の受容を拒む姿勢も見せていた。一方で、岡倉天心が関与した東京美術学校は、日本の伝統美術の発揚に努めていた。岡倉は、「(前略) 亜細亜古代の美術が殆ど一織物の如くなつて、日本は支那を経とし印度を

緯として織り出した有様がある」と述べている^[28]。19)彼は美術史の論述を通じて世界に日本を中心とした東方文化を広め、日本の近代民族国家の構築に貢献しようとした。

日清戦争と日露戦争という二つの戦争が終わった後、「(前略)能率的に創り出された国家意識は相つぐ対外戦勝と帝國的膨脹によつていよいよ強化された。自我の感情的投射としての日本帝国の膨脹はそのまま自我の拡大として熱狂的に支持せられ、(後略)^[29]」^[20]。日本の旅行会社もまた、このような国策の拡張に連動して設立された。「(前略)1912年3月、鉄道院を中心とする日本郵船、東洋汽船、満鉄などの共同出資で、前述のジャパン・ツーリスト・ビューローが設立された」、「日露戦争の「戦利品」としてロシアから権益を受け継いだ南滿州鉄道株式会社(満鉄)である^[30]」^[21]。大正中期以降、日本では大量の観光案内書が相次いで出版された。例えば、大正8年(1919年)に日本鉄道院が出版した『朝鮮・満州支那案内』が挙げられる。木下杢太郎は東北から南下し、北京から大同に向かう際、この案内書の指南と推奨された路線を一部参考にした。旅行分野にとどまらず、日本の「自我情感」と「狂熱拡張」はたちまち各領域に浸透していったのである。

明治末年から大正初年にかけて、中島端や酒巻貞一郎を代表とする日本の文化人たちは、学術著作を通じて「支那必死論」や「西方列強分割論」を積極的に唱えた。彼らは、西方列強が必然的に中国を分割し、中国が必ず滅亡し、日本は中国を「保全」すべきだと主張していた。その「保全」の実質は中国を日本の被保護国、附属国にすることであり、もし中国が滅亡した場合、唯一日本だけがその「遺産」を独占する資格があつて、西方列強はそれに干渉する権利がないということである。^[31]

このような思潮は文化領域においても顕著に表れていた。関野貞(1867-1935)は『支那の建築と藝術』において、中国が古代文物を保護する能力を欠いている時期に、「我が國の博物館に成るべく速かに、成るべく多く、支那各時代の遺物を蒐集すること^[32]」^[22]、日本の博物館は積極的に収集活動を展開すべきであると提唱していた。1918年10月8日に関野は上海学士会議において、中国南北の文化遺産は荒廃または自然消滅しており、その長期保存には適さないことを指摘した後、「日本に於ても古物の多く保存されて居る地方、山城・大和・河内・播磨・近江・甲斐・會津等は何れも空気のよく乾燥する地方である」と述べ、そして「而も支那文化の遺物は東洋文化研究の根本的資料となる者であるから、其の保存には單に支那のみならず、世界の文明諸國の人々が注意を怠るべからざる所である^[33]」^[23]と明言した。当時の中国が古代文物を保護する能力に欠けていたことは事実であるが、関野の発言には誘導的な意図があり、純粋な学術研究や中国文物保護の観点を越えた側面が含まれていた。彼の発言は文書、陶磁器、仏像、壁画などの中国の文物を暗に略奪する意図を示唆しており、客觀的に見てもこれらの主張が後の略奪行為を助長する役割を果たしていたのであ

る。日本近代東洋史創立者の一人である桑原隲藏（1870-1931）も同様に、「日本人が中国文化史の研究において、中国文化の負の部分掘り起こし、大々的に宣伝しようとするところがある^[34]」のである。そのような状況は当時の日本における中国研究において決して珍しいことではなかった。

上述のことから明らかなように、世界の考古学の中心が東方へ移行したことは、東洋主義の日本復活および日本の対外拡張政策と結びつき、20世紀初頭の30年間において日本の学者たちの中国における現地調査が盛んに行われる要因となった。この動きは戦争期に頂点に達した^[35]。そのため、当時の日本人による中国での調査の多くは日本政府の支援を受けていた。対中調査自体が日本の大陸政策を支えたことは、この視点からも明らかである。前述した岡倉天心も日本政府の命令で政府官僚として中国の旅を始めた。また、内藤湖南が1905年に中国東北への踏査を行ったのも日本政府の命令であり、政府から報酬を得ていた。その調査成果は日本政府の満州政策の制定に役立ったから、対中調査と日本の国策との関係は明白である。その後の日本による中国国内での古物発掘と古跡調査は、ほとんどが外務省または関東庁によって提供された資金で行われた。政府官僚、知識人、または留学生が中国に大量に派遣され、中国国内での調査と発掘が行われた。

このような学術的な名目の下で、日本では国策に協力するための調査機関がいくつか設立された。例えば、1900年に創設された東亜同文書院^[36]は卒業生らを集め、中国各省や地域での現地調査を行った。また、1907年に設立された東洋協会学術調査部や1908年に設立された満鮮歴史地理調査部などもある。中でも1907年に大連で設立された「満鉄」調査部（1908年に調査課に名称が変更された）は、後に日本の中国における重要な情報機関となった。また、1921年に設立された「満州考古学会」は、考古学の名目で中国東北への侵略と占拠の事前準備を行う目的であった。1925年に設立された東亜考古学会^[37]は、日本の軍事および政治の両面から経済的な支援を受けていた。

近代日本人による中国学術調査の多くは、日本の侵略拡大の国策と並行して進められたものである。それが露骨に行われるか、隠蔽的に行われるかの違いはあるが、一部の調査は学術の旗を掲げつつ国策として行われ、他の一部は間接的に国家戦略の一環として越境活動に従事していた。また、純粋に宗教目的の探検や学術調査とされるものも、国家の拡張政策と何らかの関連を持つものであった。^[38]

木下杢太郎による雲崗石窟の調査は、間違いなく彼の個人的な趣味と時代の風潮の両方に後押しされたものであった。それと同時に、以下の注目すべき3点も指摘しておきたい。第1に、木下が雲崗石窟を調査しようとした出発点は、大谷光瑞ら他の多くの踏査者とは異なっている。大谷は2度にわたり中国を訪れ、さらに3度にわたって西域に探検隊を派遣し

だが、それは学問的な目的だけでなく、主に古文物の入手と拡張を目的としていた。彼は敦煌、トルファン、楼蘭、チベットなどから大量の中国の文物を盗取したのである。木下は『大同石佛寺』初版の「序」において、自らの調査の動機について次のように述べている。「支那では是等の彫刻像は清朝にしばしば重修せられて居りますが、今日に至るまでも尚之を優秀な美術品、文明史上の貴重な資料といふ立場から眞に愛惜して居るやうにも見えません^[39]」²⁴⁾。彼が雲崗石窟を人類文明史上で評価され、全世界の芸術遺産として認知されることを望んでいたことは明白である。

第2に、木下杢太郎が調査後に導いた結論は、前人のものとは異なる点が挙げられる。前述のように、木下は事前に伊東忠太、松本文太郎、大村西崖らの先行文献を収集し、それらを持参して雲崗を訪れ、文献と照らし合わせながら現地調査を行った。木下は『大同石佛寺』において次のように述べている。「最初伊東忠太博士は大同美術を多分犍陀羅系、別言すれば希臘印度系のものと做し、日本の推古、奈良等のものをも其支流と考へられたやうです。我々は長い間さう信じて居ました²⁵⁾。また、木下は現地で雲崗彫刻の文様とインドのガンダーラ美術を比較し、松本の主張に対してその権威的な説とは異なる考え方を示した。「本来雲崗の美術は特殊のもので、それは必しも獨創的とは謂はれないでせう。然し印度の原型に比しては著しく支那化作用を受けて居ます²⁶⁾、「それで印度藍本が國土の變つた大同に持ち來されて、其地に昔から存した藝術様式と混淆して、ここに始めて生じた支那化の新鮮味が藝術的に我々を異常に刺戟するのです²⁷⁾。木下は雲崗芸術がガンダーラ美術に属するものではなく、本土の要素を集結したまったく新しい芸術であると考えていたことは明白である。伊東の考えに近く、松本も『支那佛教遺物』において、雲崗石窟の彫刻芸術は完全にインドのグプタ朝から来たものであると述べている。大村はこの北魏の彫刻がインド的でも中国的でもなく、拓跋民族の獨創であると主張していた。それに対して、木下は「漢人が造つたか、北魏人が造つたか、さう云ふことは我々には分り兼ねます。唯廣義でそれが支那化せられたものであると考へるだけで満足しなければなりません²⁸⁾」と述べ、さらに、「然し夥多の工人の大多數は支那人（拓跋族、漢民族の區別は姑く問はず）であつたに相違ありませんから、印度の原始の典型が多大の支那化を受けたのは自然のことです。それらの事は雲崗の實物に就ても證明し得るやうに思ひます²⁹⁾」と述べていた。以上の論述から、頻出するキーワードは「中国」であることが明らかである。工人は中国人、仏像は中国化、芸術表現は中国化だということが指摘されている。特に注目すべきは、木下が雲崗石窟の主要な創作について、拓跋族であろうと漢民族であろうと、いずれも中国であると主張した点である。彼は、「成程隨分支那化（漢化の意味ではなく）したものです^[40]」³⁰⁾と繰り返し強調している。間違いなく、木下は中国を一つの統一国家として見なし、岡倉天心を始めとする「南北中国論」等の中国解体論とは一線を画しているのである。以上のことから、木下の目

から見た雲崗石窟は、中国の芸術そのものであり、同時代の他の日本人の見方とは大きく異なっていると言える。

第3に、木下杢太郎が最終的に雲崗石窟に対する更なる調査を断念したのは、彼が述べた欧州行きだけが理由ではないと考えられる。彼は1925年にすでに欧州から帰国しており、その後再度中国を訪問することは十分に可能であった。ましてや、当時の日本政府は中国への旅行を積極的に奨励していた。さらに、木下は日本に戻る前の年に日本旅行文化協会が設立され、機関誌『旅』が創刊された。その創刊号には人々の目を引く満鉄の広告が掲載され、「旅行シーズン来る／朝鮮へ！／満州へ！／支那へ！」と宣伝していた。このように中国への旅行は盛んであった。これらのことから、木下が中国旅行を断念した背景には同様の社会歴史的要因があると考えられる。木下は「日本を離れて一人で内省的な生活を送っている」ようであり、中国において初めて「異域」の視点から日本を観察し、そこで初めて故国への考え方を見直した。南満医学堂に在職していた際、木下はすでに日本の寺内正毅内閣^[41]が植民地主義を推進しようとしていることに気づいていた。また、彼は、日本政府が「他国の主権内に侵入し来つて植民をする」という企みを持っていると考え、これらの事実を「満州通信」第四信で「古今未曾有の事実」と言明していた。1916年12月23日に木下が和辻哲郎（1889-1960）宛に送った手紙には、日本が「他国の主権」を侵して「植民」を進めているという「大事実」を認めつつ、自分が「その現実を直視できない」と率直に書いていた^[42]。木下の心の底には、時局に対する冷静な認識がありながら、戸惑いや迷いから脱却しがたいという葛藤が存在していた。

そのため、木下杢太郎の雲崗石窟の調査は、出発点から記述立場、考察論結、そして最終的な放棄まで、同時代の他の踏査者や中国紀行の執筆者とは必ずしも同じではなかった。さらに、これらの違いは、実際には近代日本における複雑な中国認識と日本認識の反映であると言えるのである。

四. 喪失と放棄

アメリカ学者メアリー・ルイーズ・プラット（Mary Louise Pratt）は『帝国の目—旅行記と文化との交流』において、ラテンアメリカの近代性について次のように論じている。

20世紀の最初の数十年は、ラテンアメリカにおける近代性の確立期と見なされることが多い。政治参与の民主化により、消費市場の発展、工業化、日常生活の技術革新が進み、労働組合制度、女性運動、共産主義、無政府主義などを含む現代の政治運動が台頭した結果、都市中産階級が誕生した。独立国家はしばしば激しい戦争を通じて国境を固め、公教育制度や文化機関を

通じて強力で世俗的な国民文化の構築に着手した。^[43]

実際、日本も同様である。

1921年9月14日の日記において、木下杢太郎は高揚した気分で深夜2時までその日の第四窟から第九窟までの石窟に関する調査を書き記している。彼は夢中になり、「毎日沐浴するとか毎晩衣服を更めるとか云ふやうな習慣をば脱却して」³¹⁾、「人間世界の諸欲望を忘却して暮らしてゐます」³²⁾と述べている。さらに、「恐らくはわたくしの生活に於て、最も好く、最も幸福な時であるだろうと感ぜられます」、「この幸福な心持が貴君にも乗り移るやうに⁴⁴⁾」³³⁾と心から感慨を覚えていた。しかし、1938年11月6日、木下は雲崗石窟の変化について次のように記している。「三上次男氏の「張家口から雲崗へ」の紀行を讀むと、雲崗には支那の兵營や病棟が出來て居り、また石窟古寺に隣して舊山西軍の騎兵司令の別墅も建てられたさうです⁴⁵⁾」³⁴⁾。この記述から、彼の長年にわたる雲崗石窟への思いが決して消えていなかったことが窺えると同時に、戦火の中に置かれている雲崗の現状に対する彼の憂慮も感じ取れる。雲崗を巡る大きな情勢の変化を示すために、木下はそのページに17年前に雲崗石窟を俯瞰した際に描いた風景図を挿入した。そして、『大同石佛寺』「跋」の最後には、「いくら書いても書き榮がしませんから、之れでいよいよ筆を擱くことにします⁴⁶⁾」³⁵⁾と記している。この文言には、心の中の無念さが滲み出ていた。それは1938年に書かれたもので、ちょうど京都大学が雲崗石窟に対する大規模な調査を開始した年でもあり、日本美術院と青竜社がそれぞれ行った展覧会には大同石仏を題材とした絵画作品も展示された年でもあった。木下が「之れでいよいよ筆を擱く」と宣言した後、満鉄によって「大同・雲崗の石佛」の絵葉書が発行され、さらに軍事関連の絵葉書「大同の石佛寺に遊ぶ」なども大量に発行されるようになった。しかも、この1938年という年は、まさに日本が中国に対する全面戦争を起こした翌年であり、その文言に含まれていた含意も意味深長であり、木下の日本と中国の現状に対する複雑な気持ちも推測できるだろう。

旅行記 (travelog) は「異域」や「他者」への理解を探求する文化的な表現であり、「自我民族誌」(autoethnography) の特性も持っている。その記述は、国内での民族意識の構築や、外部の文化植民地化の手段としても機能することがある。木下杢太郎の旅行記は、民族意識を拡張する手段としてではなく、むしろ自己反省の記録であり、異国での自国に対する省察の記録でもある。日本における中国への関心や旅行記のブームが隆盛する中、木下は時代の潮流に流されることなく、独自の立場を貫き通していた。彼の著作『大同石佛寺』は彼独自の特色を持ち、文学的、感悟的であり、美学的、宗教的であり、さらに自然科学と人文科学を融合させたものであった。日本における雲崗石窟に関する研究の変遷は、近代日中関係の一端を映し出すものであり、さらに、『大同石佛寺』という著書も、その歴史の複雑性を十

分に示している。

原注

- [1] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017. 『雲崗日録』, 北京: 中国画報出版社, 114頁。
- [2] 皮膚科での「太田母斑」は、木下杢太郎の本姓である「太田」にちなんで命名されたもので、「眼上顎褐青色母斑」のことを指す。
- [3] 杉山二郎1974. 『木下杢太一ユマニテの系譜』, 東京: 平凡社。
- [4] 山本讃七郎の代表作は1906年に出版された『北京名勝』である。1921年には息子の山本明によって『龍門石窟』が出版され、1933年には『震旦舊蹟圖彙—雲崗石窟』も出版された。
- [5] その後王府井大街26号に移転し、長男・明が営業を続けた。
- [6] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017. 『雲崗日録』, 「重版序」, 3頁。
- [7] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017. 『雲崗日録』, 「重版序」, 2頁。
- [8] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017. 『雲崗日録』, 53頁。
- [9] 芥川龍之介著『中国游記』の「上海游記・罪惡」, 秦剛訳2007. 『中国游記』之「上海游記・罪惡」, 北京: 中華書局, 35頁。
- [10] 芥川龍之介著『中国游記』の「上海游記・第一瞥(上)」, 秦剛訳2007. 『中国游記』之「上海游記・第一瞥(上)」, 北京: 中華書局, 5頁。
- [11] 中野孤山著『支那大陸横断遊蜀雜俎』「上海港」, 郭拳昆訳2007. 『横跨中国大陆—遊蜀雜俎』「上海港」, 北京: 中華書局, 19頁。
- [12] 中野孤山著『支那大陸横断遊蜀雜俎』「宜昌市の概景」, 郭拳昆訳2007. 『横跨中国大陆—遊蜀雜俎』「宜昌市概観」, 北京: 中華書局, 49頁。
- [13] 曾根俊虎著『北中国紀行・清国漫遊誌』「天津総説」, 範建明訳2007. 『北中国紀行・清国漫遊誌』「天津総説」, 北京: 中華書局, 6頁。
- [14] 内藤湖南著『燕山楚水』「一大園圃」, 吳衛峰訳2007. 『燕山楚水』「一大茅廁」, 北京: 中華書局, 150頁。
- [15] 木下杢太郎が描いた『百花譜』は、本草学、植物学および現地調査に基づいて実物を臨模したものであり、写実的な描き方が特徴である。描かれているアジア系の植物はすべて自分の目で見たものであり、日本特有の植物も含まれている。『百花譜』は日本でさまざまな形で出版されている。
- [16] 「清國人同盟休校」『東京朝日新聞』1905年12月7日木曜・日刊, 2版, 2頁。
- [17] 大谷光瑞1917. 「帝国の危機」, 『中央公論』3月号, 23頁。
- [18] 宋念甲2018. 『発現東亜』, 北京: 新星出版社, 242頁。
- [19] 于春・蘆繼文2021. 「雲崗石窟沉浮史—記念雲崗石窟學術發見120周年」, 『大衆考古』第11期, 20-38頁。
- [20] 雲崗石窟の公式ウェブサイト: <http://www.yungang.org/dzb/detail/2423.html>. 検索日付2023.03.15
- [21] 陳垣1919. 「記大同武州山石窟寺」, 『東方雜誌』第16卷第2号, 129頁。
- [22] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017. 『雲崗日録』, 「再版序言」, 2頁。
- [23] 本段落の引用文はいずれも木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017. 『雲崗日録』, 168頁よ

り。

- [24] 本書の第1巻では、主に文字による論述が中心となり、挿図も含まれている。第2巻から第4巻には、計623枚の図版が収録されている。
- [25] 蘆登瀛1938.『大同雲崗石窟寺古跡詳誌』, 晋北自治政府民生庁民国二十七年, 1頁。
- [26] 桑兵2022.『東方考古学協会述論』, 張明杰主編『近代日本学者対華学術調査与研究』, 上海: 上海交通大学出版社, 35頁。
- [27] 桑兵2022.『東方考古学協会述論』, 張明杰主編『近代日本学者対華学術調査与研究』, 上海: 上海交通大学出版社, 35頁。
- [28] 岡倉天心『岡倉天心全集』第3巻, 「印度美術談」, 東京: 平凡社1979年版, 263頁を参照。
- [29] 丸山眞男著『現代政治の思想と行動』, 陳力衛訳2018.『現代政治思想与行動』, 北京: 商務印書館, 160頁。
- [30] 劉建輝著『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』, 甘慧杰訳2003.『魔都上海—日本知識人的“近代”体験』, 第五章, 上海: 上海古籍出版社。
- [31] 王向遠2005.「日本対華文化侵略の特徴、方式与危害」, 『北京社会科学』第1期, 78頁。
- [32] 關野貞1938.『支那の建築と藝術』, 東京: 岩波書店, 425頁。
- [33] 關野貞著『支那の建築と藝術』, 胡積・于珊珊訳2017.『日本古代建築与芸術』, 北京: 中国画像出版社, 384頁。
- [34] 張明杰2022.「桑原隲蔵在華考察与其成果—「考史遊記」」, 張明杰主編『近代日本学者対華学術調査与研究』, 上海交通大学出版社, 165頁を参照。
- [35] 張明杰主編2022.『近代日本学者対華学術調査与研究』, 「前言」, 2頁を参照。
- [36] 1900年に南京で設立され、最初の名称は「南京同文書院」であった。その後、1901年に上海に移り、「東亜同文書院」と名称が変更された。
- [37] 1925年秋に東亜考古学会は組織の枠組みができたが、正式な設立には至っていなかった。1927年3月27日に東京大学で設立大会が開かれた。
- [38] 張明杰2016.「近代日本人涉華边疆調査及其文献」, 『国際漢学』第1期, 180頁。
- [39] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017.『雲崗日録』, 「原版序」, 5頁。
- [40] 本段落の引用文はいずれも木下杢太郎著『大同石佛寺』, 「大同美術中の犍陀羅分子」, 趙暉訳2017.『雲崗日録』, 「大同美術中の犍陀羅要素」, 192, 204, 195, 196, 194頁より。
- [41] 1910年, 寺内正毅は日本を代表して当時の大韓帝国首相李完用と『韓国併合ニ関スル条約』を調印し, 日本は朝鮮半島を併合, 36年間にわたる植民地統治が始まった。1916年10月, 寺内は日本の第18代内閣総理大臣に就任した。
- [42] 石川巧2003.「木下杢太郎の「支那」通信と「支那学」の成立」, 『九大日文』2, 57-75頁を参照。
- [43] メアリー・ルイズ・プラット (Mary Louise Pratt), 『帝国の目—旅行記と文化との交流』, 方杰・方宸訳2017.『帝国之眼—旅行書写与文化互動』, 南京: 訳林出版社, 299頁。
- [44] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017.『雲崗日録』, 115頁。
- [45] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017.『雲崗日録』, 260頁。
- [46] 木下杢太郎著『大同石佛寺』, 趙暉訳2017.『雲崗日録』, 260頁。

訳注

- 1) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 168頁を参照。
- 2) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 24-25頁を参照。
- 3) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 23-24頁を参照。
- 4) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 55頁を参照。
- 5) 芥川龍之介『上海游記・江南游記』, 2001年発行, 講談社, 45-46頁を参照。
- 6) 芥川龍之介『上海游記・江南游記』, 2001年発行, 講談社, 12頁を参照。
- 7) 『幕末・明治中国見聞録集成』第17巻: 中野孤山「支那大陸横断遊蜀雜俎」, 1997年発行, ゆまに書房, 26頁を参照。
- 8) 『幕末・明治中国見聞録集成』第17巻: 中野孤山「支那大陸横断遊蜀雜俎」, 1997年発行, ゆまに書房, 68頁を参照。
- 9) 『幕府・明治中国見聞録集成』第2巻: 曾根俊虎「北支那紀行」, 1997年発行, ゆまに書房, 25頁を参照。
- 10) 内藤虎次郎『支那漫遊 燕山楚水』, 1900年6月発行, 博文館, 201頁を参照。
- 11) 大谷光瑞1917. 「帝国の危機」, 『中央公論』3月号, 23頁を参照。
- 12) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 24頁を参照。
- 13) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 203頁を参照。
- 14) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 204頁を参照。
- 15) 通肩: 両肩を覆う。偏袒右肩: 右肩を露出する。
- 16) 中国古代の服装様式の一つで, 広い袖と長い帯を特徴とするゆったりとした衣装を指す。この様式は漢族の伝統的な衣装に見られる。
- 17) 水野清一・長廣敏雄1951-1956. 『雲岡石窟—西曆五世紀における仏教寺院の考古学的調査報告』, 京都大学人文科学研究所雲岡刊行会。
- 18) カラ・ホト (Khara-Khoto) は中国内蒙古自治区アルシャー盟エジン旗にあるタングートの都市遺跡である。中国語では「黒城」または「黒水城」と呼ばれている。
- 19) 岡倉天心『岡倉天心全集』第3巻, 1979年10月発行, 平凡社, 263頁を参照。
- 20) 丸山眞男1964. 『増補版 現代政治の思想と行動』, 未來社, 163頁を参照。
- 21) 劉建輝2000. 『魔都上海—日本知識人の「近代」体験』, 講談社, 181-182頁を参照。
- 22) 關野貞1938. 『支那の建築と藝術』, 關野博士記念事業會編, 岩波書店, 425頁を参照。
- 23) 關野貞1938. 『支那の建築と藝術』, 關野博士記念事業會編, 岩波書店, 648頁を参照。
- 24) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 27頁を参照。
- 25) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 273頁を参照。
- 26) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 296頁を参照。
- 27) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 296頁を参照。
- 28) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 281頁を参照。
- 29) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 282頁を参照。
- 30) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 278頁を参照。
- 31) 木下杢太郎1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 169-170頁を参照。

日本で生きている雲崗石窟

- 32) 木下杢太郎 1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 170 頁を参照。
- 33) 木下杢太郎 1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 170 頁を参照。
- 34) 木下杢太郎 1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 399 頁を参照。
- 35) 木下杢太郎 1938. 『重版 大同石佛寺』, 座右寶刊行會刊, 400 頁を参照。